

# 可能性への挑戦



会長 渡辺豊

巻頭にはふさわしくないかもしれない。平に御容赦願いたい。というのも全く私事に関するからだ。

つい先日「ポンペイ・コスラエ島ツアー事前勉強会」で拙い講話をさせてもらったが、あれで強調したかったのは巨石構築物、イワクラは建築の崩落状態である可能性が高いということだった。

巨石を積み上げた磐座は多く、白石島の山の突端にある「鬼ヶ城」などピラミッドと呼びたくなる代物だ。問題はこれが建造というか積み上げた当時の姿をそのままみせているのかどうかだ。

環状列石は磐境、日光を反射させるための鏡岩などははじめから今みるのとそれほど変らない状態で当初からあったろう。

しかし石垣状に積み上げられた

磐座だけではどうも当初のままではなさそうなのだ。

また日本ではその例をみないがインドネシアのスラウエシ島トラジャ族の祭祀場に環状列柱石があり、これの最も巨大なものはイギリスのストーンヘンジだ。

トラジャの環状列柱石は5000年以上前に作られたとトラジャ族は言い伝えている。その真偽はともあれトラジャ族は現在でもこの立石の上に死体を入れた木造船型柩をのせて一定の間放置している。要するに環状列柱石は葬送用の祭祀場であり墓場でもある。

トラジャの環状列柱石、イギリスのストーンヘンジをみてみると人類が石造建築をどう発展させていったか想像できる。

ストーンヘンジは高さ5メートルはあるのかとする柱を環状に並べその上には梁が架かっている。しかも円環の内部には門型組石が

4つあり、かつては木造の屋根が覆っていたとみていい。ただし今だからそんな復元形態を予測したものはいない。

現在でもストーンヘンジを使いケルトの民族宗教ドルイド教徒は年に一度大祭を行っている。

トラジャはインドネシアで最も古い先住民族だが古来高度な文化を伝え現在に至っている。トラジャの環状列柱石もイギリスのストーンヘンジも宗教祭祀施設なのはいうまでもない。日本の磐座も祭祀場なのであって、現在そうは使えない。巨石遺構もかつては祭用だったといつてまず間違いはない。

磐座、巨石遺構を研究する場合まずエジプトのピラミッドと比較することからはじめるべきだろう。

私はもう30年以來エジプトのみならずピラミッドは世界至る所にあり、巨石と洞窟を随伴すると

主張してきた。

エジプトの場合は巨石神殿となっていて内部の無数の列柱はメンヘルが建築化したもので、洞窟は整然たる矩形平面の地下墓陵マスタバ墳だ。

この三点セットの祭祀場は人類が新石器時代に至って獲得した建築空間だ。

その完成形が今から4700年程前に建造されたエジプトギザの三大ピラミッドだった。勿論神殿もマスタバ墳も完備していた。ところが神殿の多くは今はない。むしろギザよりも古いサッカーラの段状ピラミッドに随伴する神殿は半分以上崩壊していて高さ10メートルもある柱列が露天にむきだしになっていてメンヒル群を思わせる。

エジプトをモデルに日本の磐座をみると色々なことが透けてみえてくる。私自身が最も興味を抱い

てきたのは高知県足摺岬だ。

ここは巨石、磐座の宝庫で唐人岩、唐人駄場といった巨大な磐座、ストーンサークルがあり自然の洞窟にもこと欠かない。

ところが肝心のピラミッドがない。何度も探しピラミッド状の地形突起はみつかるとは高さが高く4メートル未満、これではピラミッドとはいえない。せいぜい方墳型の塚レベルだ。

足摺での巨石調査も何年か経った。何度目かに訪れたとき平石さんや富田さんからピラミッドがあったぞと聞いた。小型飛行機かヘリコプターは忘れたが空から巨石群を見下ろしていたら白鳳山がピラミッド、それも段状だという。地形図をみると確かにその痕跡がみとれる。地形図からはもう一つ段状ピラミッドの痕跡があり一つは矩形、もう一つは三角形平面だった。二つとも底面は100メ

ートルを遙かに越す。

地形図に合せて復元してみると矩形平面は四段以上、三角形平面は三段以上でテラス型だった。段の幅は10メートルはゆうにあり二つのピラミッドとも最上段は相応な広さのテラスだった。

この復元作業の前後どちらかは失念してしまったが私は京都造形芸術大学の大学院生たちと若い講師とで大平洋のど真ん中の孤島ポナペとコスラエに渡った。計二度だ。

ポナペには「ムー大陸」で有名なチャーチワードがムーの首都としたナンマドール遺跡がある。この遺跡は遠浅のサンゴ礁上に無数の人工島を造り一つ一つの島がそのまま石造建築なのだ。全体では長さ1.2キロ、幅600メートルもある「ベニス」だ。島と島の間は水路を舟で移動する。さらにこの海上都市はそのまま海底遺跡

へと繋がる。だからかつてはもつと広い都市域だった。この都市遺跡も王の墓場、ナンドワス以外は崩落していて完全のゴロタ石の集積にまで化したものから完成型に近いナンドワスまで崩落の度合いがよくみてとれる。ただしチャーチワード説とは違いこの都市は千年程前に築造されたにすぎない。しかしこのあたりは台風の発生地、使用石材が長さ6メートル、径60センチほどの六角柱状石と1メートル角ほどのものが多く小粒なこともあり台風吹き飛ばされ崩落が早い。

コスラエ島もポナペ型建築の宮殿遺跡があり現在では高さ5メートルほどの石積みが長さ10メートルほど残っているぐらいではあとは崩落、建築の姿をとどめない。この島はヨーロッパ考古学者が長い時間をかけ丹念に調べあげていて建築遺跡を方々に特定してい

る。その一つ一つをたずねてみたが崩落が激しく1メートル角の石が散らばるだけのものからどうか石積みらしきものまであり、島全体として足摺岬の磐座群とよく似た印象だった。ただし石は小粒だ。

私たちは運がよかった。地元の有力者が私たちを研究者とみただろう。今まで外人は誰一人もいれなかったという聖域に案内してくれた。

島の中央にフィンコロ山がありよく目立つ。これは聖山。この山の南斜面が聖域でここに寺院が無数にあるという。

期待して案内人に連れていってもらったが寺院だよといわれても何もない。

よくよく注意してみるとそこだけはやや盛り上がっていて盛土の周囲に高さ1メートルもない石垣が巡っている。

次第にわかってきたのは寺院とはかつて石のテラスだったということだ。単純なものは一段、大型のものでも三段が限度。

この無数のテラスがフィンコロ山南斜面にあった。在りし日を想像すると壮観だったに違いない

ここでいきなり足摺岬を思い出した。一つ一つの石の大きさは小粒だがあの巨石群とよく似た（巨石）配置ではないか。しかも聖山白鳳山にはフィンコロ山が重なる。しかも地形は聖山を北の縁上に南に大きく傾くパラボラ状だ。

足摺巨石群もかつては寺院や神殿群だった。それが3500年もの長い年月、地震や台風などによって崩落してしまっただけではない。

もともと私はピラミッドだけではなく唐人岩を長手に向って細長平面三段の巨大テラスとして復元していたからコスラエのテラス型寺院とは同質の空間感覚でこれは

造られたと確信した。ポナペ、コスラエ、足摺岬とも環太平洋文明圏だ。時代は違ってもよく似た寺院や神殿があっても不思議ではない。

コスラエの聖域の巨石配置やありようを参考にすれば足摺の巨石群も建築として復元できそうだ。これは今までになかった巨石、磐座研究の視点には違いない。

いずれにしても磐座は宗教と深く関る遺構だ。だから磐座研究には宗教研究と重なる部分が多いのも事実だ。その意味で私たちはイワクラ学会の会員がどんな宗教に属していても一向に構わない。ただ特定宗教教団とは無関係であるのは研究を目的とする会の主旨からいって当然なのだ。そこはよくよく胸にしまいこんでいただきたい。